

# 天然記念物コヤスノキをたずねて

佐藤茂樹

人員71名と限定した見学と採集の会はマタタク間に満員お断りの盛況ではあったが入梅時の天候は希望を裏切つて当の7月1日は前からの雨が残り夜明けには一時的に止んだが5時過ぎには、また降り出す。ぬれる覚悟で集つたものの、はれを祈る心でいつばいであつた。

空模様は悪いが出発時は刻々迫る。途中からの集合者の空待ちを氣遣つて定刻通り三ノ宮駅前を出発、神戸駅前、新開地、長田と同志を集めて須磨に着く。

ここで延期か断行かの話し合いをする。雨故に不参加だつた方々に気の毒だとする遠慮があつて即座にはきめかねたが、雨をおかして集つたほどの面々ゆえ、ついには決行に衆議一決、予定よりかなり遅れて出発をする。

## 沿道の植物

一行を乗せたバスは雨の神明国道を西に向つてひた走りに走る。その道の専門家ぞろいとあつて、ウグイス殿代りは壺井幹事で、沿道の植物解説がマイクを通じて車内に流れる。ポプラの並木は一ノ谷ではシンジュにかわる。下の方の葉まで繁るので理態的な街路樹である。戦時中一時流行したシンジュ蚕はこの葉で飼育した……塩屋ではマルパシヤリンバイが目につく。大島ツムギの褐色染料はこの木から……右手斜面の大きい植物はカツリグサ科のヒトモトススキ。白い花はオオフシイバラ。もも色の美しい花はマンテマ。白い花はヤブシラミ。プラタナスは今花盛り、秋の落葉に枝離れが悪いので評判が良くない。ニセアカシア（トゲアカシア）は根が浅いので風に倒れ易い。思い切つて刈りこむ必要がある。などと次から次へ、自動車のスピードに応じて急速明快に放送される。明石では渋谷幹事と須磨高校の安藤氏が乗りこまれる。

## よも山話

大久保あたりには池が多い。挺水植物のマコモ、浮葉植物のジュンサイ、ヒルムシロなどがあり、枯葉色に変わったクログワイの群落もある。帰化植物のヒメシヨオンもあれば、からかさ状の花序をつけたノラニンジンもあつて共にいま花盛りである。

池からの連想でニオの浮葉ナツの止め卵の色変りなどカイツブリの習性が真面目に、それに続いて仏頂面の美男物語りが例のカイギヤク交りで川崎氏から放送される。おかげで改修工事で一上一下する車内を爆笑

に導く。

江崎女史からは越の子……紙すき……に関する幽雅な自作の和歌が口ずさまれて一行の心を一層和の団らん

に導く。渋谷幹事からは右に左に送り迎える自然の地理や歴史さては現在の産業に及ぶ広範囲多角度の説明がある。

石の宝殿にさしかかると、前には凝灰岩で水成岩として扱われたものだが今では凝灰質石英粗面岩として火成岩に籍を変えたことなど話は岩石地質の面にも鋭いメスが向けられる。

市川の河原にはオオマツヨイグサがまつ黄に咲いている。種子は小さくて軽くぬれると粘りつく。川風の方向と一致して分布が広がり、こうして川下から川上へと分布の区域がかく大する。

姫路公会堂のところで一休みして活を入れる。改築のための解体直前の白鷺城の偉容が、右手に空高く聳えている。夢崎川を渡る頃には大浦氏から地方色豊かな、婁鹿神社の荒い祭の紹介があつて興趣を添える。

## イネの品種神力

網千に向うあたりは田植のまつ最中で、ゴザに青色布をつけた雨具が目につく。中にはビニールの雨合羽のモダン嬢姿も混じっている。

アユに名高い揖保川を渡ると御津町に入る。ここが彼の有名な日本型のイネ優良品種神力の発祥地である。

篤農家丸尾重次郎翁が自作田の有芒種に混つて、無芒種の僅かに三種の変異を認め、選抜の上試作選択を重ねた結果得られたもので、この発見が明治10年秋というから、今からおよそ80年前のことである。

岩見からはいわゆる七曲りで左は紺ベキの瀬戸内海、急カーブで絶景にも肝をひやす。

沖には建網の一種マス網（壺網といつている）が散点する。ボラヤスズギが主要なもので、アジ類、カレイ、イカ、エビ、カニなどもとれ、時にはタイ、ブリ、サワラなどもギョクカクされるという。

この辺は梅は良いが、ミカンが酸味が多く売れぬとの話にうめいのシヤレで笑っているうちに壺津に着く。

## 壺津の植物

徳川時代の要津で四国、九州の大名が、参勤交代の

際ここから船を降り陸路の旅をしたという。こうした良港も時代の波で交通運輸の情勢が変り今は全く局地的な一漁港と化している。

突角は常緑樹の繁つた神社の森で、暖地性の林相を示している。直前までのシノ突く大雨は、ほとんど止む。目についた植物をあげると

町へ下る道のはた

ハマナデシコ(花) ガガイモ(花) カキネガラ  
ン(実) ムラサキカタバミ(花) ノシギク(カ  
ミエビ) アオツズラフシ キケマン ネズミモチ  
アカメガシワ(花) イヌビワ ベニフシ(花)

神社の境内

ニワトコ クチナシ(花) テイカカズラ(花) コ  
バノトネリコ タラノキ カクレミノ モツコク  
ツルグミ ツバギ マサキ ハゼノキ ヒメユズリ  
ハ トベラ クスノキ ソメイヨシノ イタビカズ  
ラ シイ ウバメガシ エノキ ソテツ ヤブシラ  
ミ(花) ヤブガラシ(花) ドクダミ(花) ダ  
キキビ(花) ベンケイソウ(花) アオイゴケ  
エノコヅチ ノキシノブ オニヤブソテツ ヒトツ

バ ハナヤスリ

この外カキノハグサを採集した人もあるというから全体を総合すればもつと多くの植物があつたことと思う。(花一開花中のもの) —— (特に多いもの)

### 相生得楽寺のシダレグリ

相生に向う途中、東氏から、管ビンに入れたドクガと室津神社境内で採集されたキセルガイが回覧される。造船ブームに乗つた播磨造船所が湾をへだてた対岸に見える。バスは得楽寺前に停車する。寺の門を入ると左手に「和泉式部雨宿りの栗」の解説が掲げてある。「苔むしる敷島の道にゆき暮れて雨の中にし宿る木の影」遠い昔の才媛の生活を思い浮かべながら本堂の裏庭に案内される。苔むした庭が雨にぬれてひとときわ美しい。見学目的の一つである天然記念物シダレグリは見事なもので、枝は角張つてはいるが全部下垂し、葉まで垂れ下つている。花が咲かないので実がないと解説が施してあつたように記憶するが、長野県や岐阜県では開花結実し、実は小さくて食にたえぬが発芽して殖えるという。(三好学博士) 見学もそこそこに瓜生に向う、途中面白い地名の紹介に徴苦笑をする。

### 羅漢寺境内の採集

寺に入ると左手の小池にスイレンが咲いていた。スキとチガヤの繁つたやぶにヒトツバハギの雌株、雄

株ともに花の咲いたのがあつた。コヤスノキはここでだけ採集するようにとの注意があつて、右手斜面樹木の繁つた所で待望のコヤスノキが室井幹事によつて示される。皆がガゼン活気づいて栽植用にと適当な大きさのものを探し求める。

これこそ小さくて手頃だと思つたのは、刈り込まれて群り生じたヒコバエだつたりした。小降りとはなつたがまだ止まない。岩に生えたマメツタ、カタヒバ、シノブゴケなどの葉先からは雨のしづくが玉となつて降り注いでくる。木柵をめぐらした岩くつの中に釈迦如来を中心に石仏羅漢さんがならんでいる。足利時代中期以前の作という。鉢植に手頃だと喜んだ一株、刈りこむかわりにと枝を折るとブーンと香りが高い。よく見ると似て非なるシキミで笑いえぬナンセンスであつた。

コヤスノキ *Pittosporum illicioides* MAKINO  
シキミ *Illicium religiosum* SIEB. et ZUCC.  
前者の種名がシキミ属に似ているとあるのを知つたのは後のことであるが、せめての慰めにしている。

コヤスノキの花期と産地

日本植物誌(大井) ……花期-V-VI

本州(播州) ……台湾、支那中部

日本植物総覧(牧野-根本) ……花候五月

(本州中部)

室井幹事は兵庫県西部自生地の詳細な分布調査をされている。

コパンノキ、チトセカズラ、イヌムラサキ、ヤブレガサ、ミヤコアオイなどを採集する。

### 天然記念物コヤスノキ

矢野町森の磐座神社の天然記念物コヤスノキ自生地に向う。社の右手柵の中にコヤスノキの群生がある。常緑の灌木で杜そうであり、指定地とあつて完全に保護されており突に見事なものであつた。今は故人になつた天然記念物調査委員山鳥吉五郎先生を動かして記念物としての指定に努力されたのが今日の案内役室井幹事なのである。

直接柵を開けて下さつた当神社官主小林櫻村氏のお話「この辺はイノシシがよく出るので竹が育ちにくい。イノシシはタケノコが好きで掘り取つて皮をはぎ、先の柔かい部分 $\frac{1}{2}$ ほどを切り捨て元の方だけを食べる。これがその残がい」と指さされる。「また子どもを6~7頭も連れて出てくることある。子どもだけと思ひ可愛いのでさああげてもしょうものなら物かげに隠れていた親が、もうぜんとなににおそいかかり絶対に助からない。猟師も子連れのイノシシには特に用心をする。」とのことであつた。

植物相の著しく違つた代表的な採集地、三濃山は、雨にふられた時間の関係で割愛して帰路につく。この頃からは日が照り出す。そよ風に白い葉裏を見せるアベマキが目立つ。神戸地方と違つてクヌギの方が珍らしいという。

春名氏から神戸生物クラブ採集会の予定やサイカチ豆の話があり、その他会員の方々から各支部の事業計画やら、種々のお話が出て絶えず車内を賑わす。大久保附近の池づつみでルリヤナギの採集をする。毒らしくない毒草だが菜食すれば中毒する。セイタカアキノキリンソウも群つて咲いていた。

明石の街路樹にはエンジュもある。舞子辺の東南向の庭園に雄大なワシントンアが見えた。芦屋辺までは生育するという。

須磨では海寄りにオオマツヨイグサの群落があつて夕方だというのに昨日の花がまだ残つてあたりを黄色一色にぬりつぶしていた。

バスは会員の要求に応じて、次々に停車しては人々を降ろし各人は今日一日の楽しい貴い採集品をみやげに惜しい別れを告げて予定より少し早く明るい中に解散したのであつた。

## 丹波支部生物採集記

樋口 繁 一

昭和31年9月2日氷上郡氷上町で本会会長森為三博士を講師にお願いして、生物採集会を開催しました。参加者は農大浜田教授、野草助教授、堀江助教授、柏原高校の松山、井上、山本、大西教諭、氷上中学の開田教諭を始め、多紀郡、氷上郡の高校、中学の教員及び生徒等約45名で盛大な採集会を開くことが出来ました。

先ず成松町の葛野川（加古川の上流）でバイカモ（毛茛科）の採集。この川底、流水の中一面にバイカモが繁殖して緑色になつている。白い花をつけたのもあり、其他ミズガラシ等も混生している。この植物は寒地にあり、多紀郡では大山村1か所です。次に成松町の西端、とげ魚科のミナミトミヨの絶滅地の見学に行きました。

この地は佐治川の冷水が堤を通して湧出して清水が常に多量溝に満ち流れて池に充ちていた。ここに珍魚ミナミトミヨが昭和5年頃まで棲息していたところです。当地方ではカツオと呼んでいたが背に9本の刺を有し、水草で巣を造つて産卵し、雄はその巣の周囲を廻つて警戒する珍らしい習性がありました。

森先生の説明によると、

ミナミトミヨは日本海に注ぐ河川に棲む魚であるのに、加古川の上流にいたことは以前この土地が日本海に注ぐ由良川の上流と関連があつた証拠である。若し棲息して居れば天然記念物に指定する価値がある。今は絶滅して残念であるが、せめても柏原高校の標本を回覧する。学名 *Pygosteus kaibarae* TANAKA の

種名 *kaibarae* は、田中茂穂博士の記念名で、棲息地が我国の最南端であるので、和名もミナミトミヨとされたのである。今も由良川の上流京都府下には、ミナミトミヨの棲息地がある。

ここから葛野の達身寺まで動、植物、昆虫を採集しつつ行く。この土地は早春の植物が豊富なところで山すその竹藪や草の中に

カタクリ、イチリンソウ、ニリンソウ、アズマイチガ、ユキワリイチガ、キクザキイチリンソウ、マルバコンロンソウ等が、色とりどりに咲き乱れるところである。

達身寺より奥の溪流は、丹波、但馬、播磨の三国の境するところで7~800m 近くの山の溪谷でヒラベ（アマゴ）が棲息しているのでこの採集に向いやつと数匹を採ることが出来た。

森先生の説明によると

ヒラベはマスの陸封されたもので、太平洋の河川のもの日本海の河川のものとの2型がある。前者がアマゴで後者がヤマメである。両者を比較すると体側に朱の斑点があるので区別することが出来る。即ち斑点の有るのがアマゴで、無いのがヤマメである。この地のヒラベは朱点が少なく、加古川の上流であるのに由良川との関連がある。

隣の多紀郡後川にアマゴが棲息しているが、これは武庫川の上流で、朱点が多く明瞭にアマゴ型である